

自然

京都は山や川、森や池などの自然が街と調和しているところです。四季折々の表情を見せる自然は、山紫水明、花鳥風月とうたわれるなど、その美しさは人々の心をとらえてきました。また多種多様な動植物が生息し、希少種も棲むなど、都市でありながら豊かな生態系が各地で見られます。

京都市は北・東・西の三方を山に囲まれた盆地です。そのため、夏と冬や朝晩の気温差が大きいという特徴があります。平均気温は温暖ですが、冬は「京の底冷え」といわれるほど寒さが厳しく、夏は最高気温が30度を超える日も珍しくありません。また、北部の北山には「北山しぐれ」と呼ばれるように、たくさんの雨が降り、水源地となっています。このような気象条件は、北山杉や清滝の渓谷美などの特徴的な景観と自然をめぐみ、四季の変化は京都の食文化や年中行事などにも影響を与えています。

地

賀茂川（鴨川）と高野川の合流点。ジョギングする人やお弁当を広げる家族連れで、川岸はいつもにぎやかです。



水

三方を山で囲まれている京都には、山から湧き出した水がいくつもの川になって流れています。人と川との関わりも深く、川の名が地名に使われたり、川岸が憩いの場になるなど、市民の生活に馴染んでいます。また、京都は質のいい地下水を蓄えています。昔から京料理、茶の湯、酒づくり、京染めなどに使用され、水は京都文化の発展に一役買っているといえるでしょう。

京都市北部にある深泥池は、珍しい湿地生植物や水生生物が多いことから天然記念物に指定されています。しかし、ここでも環境の汚染が問題視されています。



天然記念物にも指定されている深泥池。京料理には欠かせないジュンサイも生育していますが、近年は汚染のため数が減っているといわれます。

山

北に座する鞍馬山、西には愛宕山と西山、東には比叡山から続く東山連峰が美しい尾根を運ね、いずれも豊かな自然が残ります。義経伝説で有名な鞍馬山は、隣り合った貴船の山々とともにチョウの宝庫としても有名で、国チョウ「オオムラサキ」や希少種の「ギフチョウ」をはじめとするさまざまなチョウ類が生息しています。

また、滋賀との県境に位置する比叡山には、スギ・ブナ・モミジなど豊かな植生が残されています。そのため、野鳥が多く飛来し、天然記念物比叡山鳥類繁殖地の指定を受けています。



京のまちを囲む山々には、今も多くの自然が残ります。夏には、五山の送り火、秋には紅葉の見物と、観光客は絶えることがありません。

緑

京都市の中心部にある京都御苑は、豊かな自然の宝庫です。エノキ・ケヤキなどの落葉広葉樹、クスノキ・シイノキなどの常緑広葉樹など、多種多様な生物が生息しています。

糺ノ森は下鴨神社の社域に広がる森で、平安時代以前の植生を残しています。中には、樹齢600年といわれる古木もあります。たくさんの種類の木々の中、キノコの種類も豊富なのが特徴です。

また、高雄山周辺は北山杉の産地です。「北山杉」とは、この辺りに植えられている杉の一般的な呼び名で、古くから茶室の材料として利用されています。



京都府立植物園は、北山通から北大路通までを占める広大な植物園です。園の北側には、四つの池に囲まれた「半木の森」という自然林があり、京都盆地の植生を知ることができます。

ちょっとコラム

京都市における環境への取組と人々の知恵

1997年12月の「地球温暖化防止京都会議（COP3）」で「京都議定書」が採択された地でもあることから、京都市では全国に先駆けた環境への取組を展開しています。

平成9年から、家庭で使用済みの食用油を回収し、精製してバイオディーゼル燃料を作り、市のゴミ収集車全車に利用を開始しました。現在では市バスにも利用されています。



京エコロジーセンターは、COP3の開催を記念して開設された環境学習と環境保全活動の拠点で、館内では体験型展示やシアター、さまざまな資料から環境問題、京都ならではのエコロジーの知恵について学ぶことができます。

また、同センターの運営に関わる京のアジェンダ21フォーラムは、企業に環境改善活動を促すため、環境対策に関して京都独自の規格を設け、審査・登録する環境マネジメントシステム「KES」の制度を実施しています。このほか、さまざまな環境保全活動・地球温暖化対策が展開されていますが、もともと京都の人々は、暮らしの中で自然と上手く共生してきました。なかでも古くからある町家は、土壁や通り庭、坪庭などを取り入れ、夏は蒸し暑く冬は底冷えのする京都の気候の中でも快適に過ごせるような、工夫を凝らした建築様式になっています。